

| | |
|---------|------------------------------|
| 氏名（本籍） | 山田 圭介 |
| 学位の種類 | 博士（心理学） |
| 学位記番号 | 博甲第 7480 号 |
| 学位授与年月 | 平成 27 年 3 月 25 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 |
| 審査研究科 | 人間総合科学研究科 |
| 学位論文題目 | 感情制御によるスピーチ場面の克服過程に関する心理学的研究 |
| 主査 | 筑波大学准教授 博士（人間科学） 青木佐奈枝 |
| 副査 | 筑波大学准教授 博士（学術） 橋本佐由理 |
| 副査 | 筑波大学教授 杉江 征 |
| 副査 | 筑波大学教授 博士（体育科学） 中込 四郎 |

論文の内容の要旨

（目的）

本研究は、複数の聴衆を前にして何らかの課題を行うというパフォーマンス場면을対象として実施したものである。さらに、パフォーマンス場面の中でも経験頻度が多いと考えられるスピーチ場면을対象としていた。

理論的検討において、先行研究は、どのような感情が喚起されているのかということと感情（の強さ）とパフォーマンスの関連についての検討がなされてきたことを指摘した。そして、本研究においてはスピーチ場面における感情制御が、スピーチ前やスピーチ後の心理状態にどのような影響を与えているのかを検討することを目的としていた。具体的には、スピーチ場面におかれた際の態度と実施したスピーチに対する主観的な評価に影響する感情制御方略を検討することを研究の課題とした。さらに、上記2つの検討課題に対してさらに深く掘り下げ、研究の目的を①感情制御能力がスピーチ場面への態度に与える影響を検討することと、②スピーチへの主観的満足感に影響を与える感情制御方略の検討の2つとし、具体的に扱う要因（変数）について検討した。研究の目的①に対しては、3つの研究を設定した。感情制御困難性尺度を作成すること（研究1）、感情制御能力を表す変数である、感情制御困難性、活動指向性とスピーチ場面に対する態度との関連についてそれぞれ検討することであった（研究2、3）。研究の目的②については、4つの研究を設定した。スピーチ場面において“重要である”と考えられている尺度を探索すること（研究4）、どんな人がどんな方略を重視しているのかを検討すること（研究5、6）、そして最終的にその効果を比較すること（研究7）であった。

(対象と方法)

対象者はすべて大学生および大学院生であった。方法は、質問紙法ならびに実験法であった。研究1から研究6までは質問紙法により実施し、研究7は実験法により実施した。質問紙法については、大学の講義の空き時間を利用して集団一斉配布によって実施した。また、実験法については、講義の空き時間を利用して被験者の募集を行った。

(結果)

研究1において感情制御能力の4領域を測定する尺度を作成した。そして研究2、研究3においては、感情制御能力とスピーチ場面に対する態度の関連を検討した。その結果、自らの感情に対する統制感の低さがスピーチ場面に対する積極的な態度を抑制していることが明らかになった。さらに、感情に対する統制感の低さは、感情受容困難や感情喚起時の行動統制困難と強い正の関連があることが明らかとなった(研究2)。そして、感情制御能力に関わるとされる活動指向性は、スピーチ場面に対する態度に影響を与えていなかった(研究3)。以上の結果から、感情に対する統制感を高めていくことでスピーチ場面に対する態度が改善・変化される可能性が示された。

続いて、スピーチに対する主観的満足感に影響を与える感情制御方略について検討した。まず、スピーチを成功させるための方略として“解放の想像”方略，“イメージ・集中”方略について探索的因子分析によって抽出した(研究4)。そして、どのような個人がどの方略を重視しているかという個人特性と重視する方略の関連を検討した(研究5・6)。その結果から、スピーチ場面においてネガティブな感情を喚起する傾向にある個人は、“解放の想像”方略と“イメージ・集中”方略の双方を重視していることが示された。そして、ポジティブ感情な感情が喚起される個人は“イメージ・集中”方略を重視していることが明らかになった。実験的検討の結果より“イメージ・集中”方略を実施した方が、“解放の想像”方略を実施するよりも主観的満足感が高まることが示された(研究7)。したがって、一般的に重視されている方略の中では“イメージ・集中”方略を行うことで主観的満足感を高めることができるということが明らかとなった。

(考察)

7つの研究で得られた知見を整理し、その学問的意義および社会的・臨床的意義について考察した。そして最後に本研究の課題と限界について示した。

従来のスピーチ場面を対象とした研究では、それを経験する前後の心理状態についての検討が不十分であった。そこで、本研究はスピーチ場面を経験する前の態度とスピーチ後の主観的満足感について検討した。

まず、自らの感情に対する統制感が低い場合に、スピーチ場面に対する積極的な態度が抑制されていることが明らかになった。これはストレスに対する統制感とコーピングの関連を述べたストレスに関する先行研究を支持する知見であった。今回作成・使用した尺度は“感情制御のできなさを測るものであったため、促進要因については今後検討が必要であると考えられる。つまり、本研究は“なぜスピーチ場面に対して積極的な態度をとることができないのか”ということを明らかにした。具体的には、自分に起こった感情に対してうまく制御できない(制御する自信が低い)場合に、その態度を抑制することを示した。したがって、現在積極的な態度をとることができていない個人に対して、感情の制御方略を身に着けたり感情の統制感を向上させたりすることで、今後の態度の改善・変化が見込まれる。このように、積極的な態度を抑制している要因が明らかになったこと

については、臨床場面を含めた有効な支援につながると考えられる。その一方で、積極的な態度を促進していく要因については今後の検討が必要である。

また、自らが今から行うスピーチを具体的に想像することによって、主観的満足感がより高まることを示した。先行研究においては、課題と関係のないことを考えることによってパフォーマンスが低下することが明らかになっていたが、本研究の結果はこれを支持するものであったと考えられる。

世間一般において有効であると信じられている方略の中でも、主観的な満足感がより高く報告されるような方略を示したといえる。さらに、直前の教示によって課題への主観的満足感に変化がみられたことは新たな知見であった。この点において、健常者に対して即時的に実施できる知見が得られたといえる。

本研究は主観的な評価を1項目で測定していたため、あくまで本人の満足感に焦点を当てていた。本論文において得られた知見を社会の中で応用していくためには、より詳細なパフォーマンス指標を取り入れることや評価懸念や喚起される感情の強さといった変数についても検討していくことが必要であると考えられる。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、パフォーマンス場面としてスピーチ場面を取り上げ、スピーチ場面における感情制御が、スピーチ場面やスピーチ後の心理的状态にどのような影響をあたえているのかを心理学的に実証的に検討したものである。本研究の独創的な点は、これまでほとんど検討されることの無かったスピーチの前後の状態について、感情制御能力と主観的満足感、日常的・一般的な感情制御方略に着目した点である。本研究では、感情制御能力を実証的にとらえるための尺度を作成し、感情制御能力がスピーチ場面への態度に与える影響を検討するとともに、スピーチへの主観的満足感に影響を与える一般的に重要視されている感情制御方略を明らかにした。スピーチ場面前後の状態を取り上げて、感情制御の観点から、一般の人たちがどのような態度でスピーチ場面に臨み、どのような対処を行っていくとよいかについて示唆に富む知見を提供するもので、本研究の成果は今後のこの領域の研究に大きく貢献するものであり、高く評価できる。

以上、研究の意義、独創性、成果、論文のまとめ方など、博士論文としての水準に達していると判断される。

平成27年1月7日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。